

平成 26 年 5 月 26 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520799

研究課題名(和文) 地域間交通からみる古代東北の政治と社会

研究課題名(英文) A study of the political and social exchange between the regions in ancient Tohoku area

研究代表者

永田 英明 (NAGATA, HIDEAKI)

東北大学・学術資源研究公開センター・准教授

研究者番号：20292188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：古代東北の各地域を結びつける交通路や交通システム、およびその上の展開された具体的な交通のあり方を解明し、東北古代史を各地域の相互関係の歴史として捉え直すことを目指した。陸奥・出羽両国における諸地域を結ぶ交通路とともに、両地域を結ぶ多様な交通路をもとりあげ、律令国家の地域編成におけるその役割を解明するとともに、蝦夷社会内部の交通路にも視点を広げ「官道」にとらわれない古代東北の多様な交通のあり方を解明した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at regarding history of ancient Tohoku region as history of the exchange between each regions through considering the traffic route, a traffic system. I examined the various traffic routes of the areas in both Mutsu and Dewa, and clarified the role in local organization in the Ritsuryo political system. On the other hand, I clarified various ancient traffic routes, and also clarified traffic exchanges between each regions of the Tohoku society, by extending a viewpoint also to the traffic route inside the Emishi society.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 日本史

キーワード：官道 河川 駅家 辺境 蝦夷

## 1. 研究開始当初の背景

(1)近年の東北古代史に関する豊富な研究成果は、辺要国として一括されがちな陸奥出羽両国国内における諸地域の多様性を明らかにしてきた。たとえば仙台平野・大崎平野を境とした古代陸奥国の南北差や、陸奥と出羽の関係についても、両者の地域的特色が対比的に捉えられている。一方でこれらの諸地域が律令国家の領域であるか否かにかかわらず相互に様々な関係を持っていたことも指摘されている。

(2)古代交通史の研究は、古代官道に関する地理学的・考古学的研究の進展を受け1990年代以降大きく進展した。しかし古代東北における地域間交流を支えた具体的な交通路や交通システムについては、十分検討が進んでいない。東山道などの駅路比定は古くから行われているが、交通制度・交通施設の実態や変遷についてはなお検討の余地が大きい。またいわゆる「官道」の復原に偏りがちで、地域の特性に応じた多面的な交通路のあり方を追究した研究は少ない。

## 2. 研究の目的

本研究では、東北古代史を各地域の相互関係の歴史として捉え直すことを意識し、古代東北の各地域を結びつける交通路や交通システム、およびその上の展開された具体的な交通のあり方を明らかにすることを目的とした。具体的には、下記の課題をかけた。

(1)古代東北の地域間交通路の調査・復原  
文献資料および関連考古学的成果の精査、地形・地名の精査など歴史地理学的手法に基づく成果の確認、精査に中世・近世における交通体系のあり方などを加味し、古代東北における地域間交通路の多面的な様相について可能な限り復原を試みる。

(2)古代東北における交通制度・施設の実態に関する調査研究(駅家・関所・水駅)  
駅伝馬制や関所の制度などに関する研究成果をふまえつつ、東北地域におけるそうした

制度の実態について、その具体像、その変遷のあり方を解明し、あわせて古代陸奥出羽両国の交通路に対する政策を考えた。

(3)城柵官衙遺跡と地域間交通の関係の分析  
城柵・官衙遺跡を中心に出土する木簡・墨書土器等の出土文字資料の調査分析と、文献資料の検討を軸に、さらに考古学的成果等の精査を通じて、こうした政治施設を拠点とする、陸奥出羽両国国内および両国間、さらには北方の蝦夷社会との間における地域間交通の実態を解明する。またこの作業をつうじ、地域支配や地域社会のなかにおける城柵や国府・郡家等の諸施設の機能・役割を交通という視点から明らかにする。

(4)古代東北における地域間交通と地域社会編成に関する分析(研究の総括)

以上の成果をふまえ、古代東北地域における地域間交通と地域社会編成の関係、その政治的・社会的意味について古代国家の辺境支配政策とその展開過程の中に位置づけ検討・解明する。

## 3. 研究の方法

六国史その他の文献史料の精査を基盤としつつも、歴史地理学のないし考古学的な修法で検出される交通関係遺跡やその推定地、さらには各遺跡から出土する遺物(特に出土文字資料)の分析などをも行いながら研究を進めた。文献史料の精査については、公刊されている刊本を検討するほか、『延喜式』兵部省式所載駅名や『倭名類聚抄』郷名部の調査のため、東京国立博物館などが所蔵する写本及びその複製物などの精査も行った。

交通路復原に際しては、古代史に限らず前近代の交通路に関する史料、さらには明治期の地図史料などにも広く視野を広げ情報の収集をおこなった。また同時に遺跡やそれを結ぶ交通路の地形状況などを確認するための現地踏査も実施した。

## 4. 研究成果

三年間にわたる研究の成果として、以下に

述べるような知見を獲得し、その一部は論文や学会発表などの形で公表した。

#### (1)古代駅家制度と『倭名類聚抄』掲載の「駅家郷」および九・十世紀駅家制度との関係

古代東北の駅家制度を理解する前提として、従来共通理解が得られていない『倭名類聚抄』巻十郷名部所載の「駅家」郷と駅戸集団としての「駅家」との関係について、名古屋市博物館所蔵本とその他の写本（高山寺本・大東急記念文庫本）との関係を検討した。東急本の駅家関係郷名はほぼ全て「駅家」表記で統一されているが名古屋市博本のそれは多様でかつ高山寺本にわずかに残る表記の特色に共通し、それは木簡や正倉院文書等の一次史料に見られる駅戸集団の集団名表記とも共通することを指摘、倭名抄のこれらの郷名を駅戸集団そのものとみて支障ないことを明らかにした。同時に、倭名抄の駅家関係郷名記載が当初の郷名部には殆ど記載されず転写の過程で追補されたものである可能性を指摘し、名本や東急本の駅家郷名記載がそのまま全国の駅戸集団の分布を網羅したものとする必要がないことも指摘した。これらの知見は論文「九世紀山麓駅家の経営」（鈴木靖民ほか編『古代山国の交通と社会』）として発表した。

#### (2)陸奥国における交通路と地域編成の関係。

八世紀代の陸奥国北部の地域区分として「海道」と「山道」という二つの交通路に即した地域区分が存在したことが知られているが、従来は国府多賀城から色麻・玉造を経由し栗原地方以北に続く交通路と、玉造郡から分岐東行し牡鹿方面から沿岸部に続く交通路の二つを基軸にした、律令国家の版図に組み込まれた地域の区分と理解されていた。しかしその根拠とされている延喜民部式の郡名配列は、8世紀段階では本来は国府多賀城を起点に大崎・牡鹿地方を周回する交通路によって黒川以北十郡域を一体的に編成するものであったと見られ、「海道」「山道」は

あくまで黒川以北十郡域の外側の、北方に延びる二本の交通路に沿った地域に居住する蝦夷集団の区分として理解すべきである。またそこからさらに派生する問題として、仙台平野と大崎・牡鹿地方における交通路の体系、特に国府多賀城と小田・牡鹿・桃生方面とを直接結ぶ交通路について、残存地名や遺跡の状況、中世・近世の街道の状況などをもとに検討をおこない見通しを獲得した。成果についてはすでに口頭報告を行い、その後論文としての執筆をすすめている。

#### (3)出羽国における交通路と地域編成の関係。

出羽国における地域編成と交通路の関係を考える素材として、最上川水運の問題を検討した。『延喜式』兵部省式の出羽国駅伝馬条に見える、船を配したいわゆる水駅の多くは、実は「伝馬」として船を配置したもので、それは伝馬制利用のあり方とともに、最上・置賜地方と庄内平野における日常的な交通のあり方をも反映している。野後駅はそうした陸路と最上川水路の転換点と考えられ、近年調査が進められている駒籠楯跡の性格を理解する上でも重要である。こうした最上川舟運の掌握・維持は、駅伝馬制の運営以上に、越後国の北端に新設された出羽郡（庄内平野）と内陸部の最上・置賜2郡とを結びつける形で誕生した出羽国の経営に必要不可欠だったと考えられ、次項(4)で述べる陸奥出羽連絡駅路の開設に関する検討をも踏まえると、和銅五年の出羽建国自体、最上川水運に対する支配を伴うものであったと考えられる。以上の見解については学会報告（急病のため紙面による報告）をおこなった。

#### (4)陸奥・出羽両国の政治的関係と交通路

和銅五年に越後国から分置する形で誕生した出羽国は、成立当初北陸道に所属したがのち陸奥国と同じ東山道に所属した。出羽の東山道移管の時期については近年、天平九年に実施された陸奥国 - 出羽連絡路の開削事業に伴うものという理解が提示され、同時

に陸奥・出羽国府の連絡路そのものも天平九年に開かれたとされている。しかし関連資料の再検討を通じ東山道への所管替えは養老律令の編纂・修訂作業が一応の完了を見た養老六年頃ですでにおこなわれていたことが明らかとなった。またその結果天平九年の連絡路開削記事に見られる最上郡大室駅についても、陸奥出羽両国を結ぶ最上川流域の駅家としてすでに天平九年以前から存在していたことが明らかとなり、これは、村山市土生田に所在する小字名「大室」を大室駅の比定地とする最近の指摘とも符合する。これらの事実から、天平九年の連絡路開削事業もあくまで出羽柵の秋田移転に伴う陸奥国府から秋田出羽柵への支援体制の整備策と見るべきことが明らかである。

この連絡路は天平宝字三年の雄勝城造営と横手盆地への駅家設置という形で結実したが、所謂三十八年戦争の成果として胆沢城・志波城が設置されたことにより陸奥国から秋田城への支援交通路がこれら北上川中流域の城柵を拠点とした形に変化した結果、天平九年および天平宝字三年開削路の駅路としての役割が低下した。以上の見解は仙台古代史懇話会における口頭報告としてすでに報告し、論文としての執筆を進めている段階である。

#### (5)エミシ社会内部における交通路と政治支配との関係

古代交通路の研究は律令国家が整備した「官道」に研究対象が集中しがちであるが、すでに考古学的な研究成果からはエミシ社会が諸地域間の多様なネットワークを持ち成り立っていたことが明らかとなっており、エミシ社会において自生的に発達していた交通路の存在を外して東北古代史を考えることはできない。文献の精査によっても、征夷などによる陸奥側の蝦夷社会の動揺が出羽側の蝦夷社会に及ぶ(またはその逆)事例は多数見られる。エミシ社会は大小様々な

「村」が個別的に存在し、政治的統合が十分進んでいない社会であると考えられるが一方で相互の地域間におけるネットワークも相当程度発達していたと見られる。

またこれに関連して、前掲(1)の成果をもふまえ蝦夷集団の区分として登場する陸奥北部の「山道」「海道」の基軸となった交通路について検討をおこない、これらの交通路を律令国家が主導して整備した「官道」として捉えることはできないこと、一方で蝦夷社会内部の側からは、北方の蝦夷社会と城柵とを結ぶ交通路として、「村」を単位とした個々の蝦夷集団を越えた社会的機能を有し、沿道の蝦夷集団との関係が蝦夷社会にとっても律令国家側にとっても重要な政治的意味を持ったことなどを明らかにした。このような視点を設定することで、従来「官道」の北進の過程として理解されがちであった駅路などの延伸が、交通路に対する公権を律令国家が接收していく過程に他ならないことを指摘した。これらの知見については、その一部を論文「文献から見た古代「官道」論の課題」として発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

永田英明、文献から見た古代「官道」論の課題、国土館考古学、査読無、第6号、2014年、138-150ページ

〔学会発表〕(計 3件)

永田英明、文献から見た駅家の特質と出羽、第40回古代城柵官衙遺跡検討会、2014年2月23日、山形県山形市

永田英明、古代出羽国の地域編成と交通体系、仙台古代史懇話会、2014年1月25日、宮城県仙台市

永田英明、陸奥国山道海道小考、仙台古代史懇話会、2012年4月21日、宮城県仙台市

〔図書〕(計 2件)

永田英明ほか、「古代山国の交通と社会」、八木書店、2013、115-140ページ

永田英明ほか、「講座東北の歴史第四巻 交流と環境」、清文堂出版、2012、15-40ページ

6 . 研究組織

(1)研究代表者

永田 英明 (NAGATA, HIDEAKI)  
東北大学、学術資源研究公開センター、  
准教授  
研究者番号：20292188